

2006年OECDの学習到達度調査の結果について考える

- 学力を向上させるために大切なこと -

開倫塾 塾長 林 明夫

1. はじめに

開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」を聞いていただきありがとうございます。12月4日(火)に、OECD(経済協力開発機構)の15歳児を対象とする2006年学習到達度調査(PISA調査)の結果が発表になり、翌日の各紙の一面に大きく取り上げられました。今回の発表後、教育関係では蜂の巣をつつくような大騒ぎになっています。

2. 学習到達度調査とは

- (1) この調査は2000年に始められて、3年ごとのサイクルで実施されています。
- (2) 調査の内容は、義務教育終了段階の15歳児が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどれだけ活用できるかどうかを評価する。(特定の学校カリキュラムがどれだけ習得されているかをみるものではありません) 思考プロセスの習得(物事の考え方をどういう過程で習得しているか)、概念(物事の考え方)の理解、様々な状況でそれらをどう生かすかということです。

3. 2006年調査結果の概要

- (1) 日本では約120万人いる高校1年生のうち約6000人が参加しました。結果は既にご承知の方も多いと思いますが、科学的な知識(科学的リテラシー)では、1位フィンランド、2位香港、3位カナダ、4位台湾、5位エストニア、6位日本となっています。読解力については、1位韓国、2位フィンランド、3位香港、4位カナダ、5位ニュージーランド、6位アイルランド、7位オーストラリア、8位リヒテンシュタイン、9位ポーランド、10位スウェーデンで、15位が日本です。数学は、1位台湾、2位フィンランド、3位香港、4位韓国で、日本は10位でした。
- (2) 1回目の調査では日本がかなりいい順位にいたのですが、前はフィンランドが高い成績を取りました。今回もフィンランドが総合1位で、日本は6位でした。順位が低下したことが原因で、いろいろな議論がされているわけです。
- (3) 日本は国際比較で学力を上げる取り組みの1つとして、今年の4月に全国学力調査を実施し、その結果が秋に出ました。また、何年か後には学習指導要領が全面的に改訂となります。これでOECDの学習到達度調査の結果に基づく体制固めができましたので、改訂後の学習指導要領が本格化するのあと3年くらい、その成果が出るのが10年後くらいです。ですから、おそらく15年くらい先の調査では、さらに良くなると思います。
- (4) しかし、他国もOECDの学習到達度調査の結果を良くしようと努力しています。日本だけが頑張っているわけではありません。これからは国際的な学力競争になりますので、日本も順位を挽回し、フィンランドに負けまいと努力したいと思います。

(5)表現が適切ではないかもしれませんが、フィンランドの優れているところは、レベルの低い方が非常に少ないということです。読解力の習熟度レベルを6つに分けると、レベル1未満の割合は、フィンランドが0.8%、日本は6.7%です。2つのレベル(レベル1未満とレベル1)を合わせると、フィンランドは5%以下ですが、日本は20%近くになります。このことがフィンランドと日本の大きな違いかもしれません。フィンランドではほとんどの方が一定レベル、つまりレベル2以上の習熟度があると言えます。

4. おわりに

勉強が不得意な子をゼロにするというのも1つのやり方かもしれませんが、また、伸びる子は、どんどん伸ばしてあげることも大事かもしれません。しかし、基礎的なことが一番大切です。一番大切なことは読書です。深くじっくりと本を読むことを通じて、学力を向上させて頂きたいと思います。今日は、OECDの15歳児の学力到達度調査(PISA調査)の結果を皆さんと一緒に考えてみました。

以上